

2021年横浜ナザレン教会・降誕節第三主日礼拝

「平和への道を知る」

ルカ福音書第19章41節から48節

【聖書】

ルカによる福音書 19: 41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。43 やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまいうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

45 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始めて、46 彼らに言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならぬ。』／ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」47 毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、48 どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。

1 主イエスに学ぶ

昨日 1/9 の神奈川県での新型コロナ感染者数は、999名。年末年始の首都圏の感染急拡大という事態に、行政の方針もなかなか定まらず、何をどうしていいのか、この先どうなるのか、なんとも言えぬ不安が私達を覆っています。しかし、このような時だからこそ、冷静にするべきこと、すべきでない事を知り判断する賢さを天の父なる御神に求めたいと思います。しかし、天の御神に賢さを求めるとは、どういう事なのでしょう。

不安の中にある、と言う時、エルサレムでの主イエス一行ほど不安の中にある者達はいないかもしれません。今日の聖書テキストは、主イエスがエルサレムへ入る場面です。この後、主はエルサレムで数日を過ごされ、逮捕され十字架に架けられる事となります。ルカによる福音書始めとした共観福音書には、ヨハネ福音書のようなまとまった告別説教はありません。ですが、最後の数日間、エルサレム神殿で主イエスが、弟子たちと民衆達に教えておられる様子がしっかりと描かれています。今日はその導入の場面でもあります。ここから、私達は、主イエスの最後の日々を見ていく事となります。いわば大きな不安の中に残していかざるを得ない弟子たちへの主イエスの遺言とも言っている、想いのたけが詰まった言葉と行いに目を凝らし、耳をそばだてたい、そうして、不安の中にあっても確かな希望をもたらす神の導き

を求めていきたいと思います。

2 主イエスの涙、神の悲しみ

主イエスは、今、王として神の都・エルサレムに入城されています。先々週の12/27の礼拝では、旧約聖書の預言通り、軍馬ではなく、驢馬に乗り平和の王としてエルサレムへの道のりを歩み始めた所を見ました。2000年前の古代世界では、王や将軍たちは、勇ましく煌びやかな入城行進を仕立て、征服した町へと入って行きました。そんな入城行進の仕上げは、街にある神殿で、神に犠牲を献げる儀式を行う事でありました。そうしてこの町は自分の支配下にある事を宣言したそうです。主イエスもこの習慣に則って、エルサレムへ入った後、真っ先に神殿に向かっています。しかし、主の入城行進には、他の王や将軍達には見られない大きな特徴があります。それは、主がエルサレムを見て泣かれた、ということと、神殿の庭から商売人を追い出したという二つです。この二つは深く密接に関連しているのだと思います。

実は「主が泣かれた」という記述は、非常に珍しいものです。ルカ福音書では、今日の41節だけ。「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。」ここの「泣いて」というギリシャ語は、強い感情の動きの表現する言葉で、死者や失われた者のための悲しみと嘆き、別離の痛みを表していると言われており、強く心が揺さぶられる様子を表すそうです。主は悲しみのあまり「慟哭した」と言ってもよいかもしれません。そして、主イエスが、そのようにただ一度哭いたのは、ご自身が審きにあっている時でも、茨の冠を頭に押し当てられた時でも、或いは、十字架を背負わされて歩いておられる時でも、十字架に釘打たれた時でもありません。エルサレムの都が見えて来た時です。都を見ただけで涙があふれ出しています。

しかし、この時、エルサレムが、主が涙を流すほどに悲惨な状態にあったかということ、そうではありません。確かにイスラエル民族はローマ帝国に支配されていて、エルサレムにはローマ軍も駐屯していました。ですが、神への信仰も神殿での祭儀も許されていましたし、サンヘドリンという議会もあって、ユダヤ人の間での自治は認められていたようです。地方都市と違いエルサレムには高級祭司や貴族達も多く住んでいて、経済的に豊かな住民も多かったそうです。それに、主がエルサレムに入城された時季は、この都が最も華やぐ過越祭の直前、世界中から巡礼者が押し寄せてきて、普段は五万程度のエルサレムの人口が、二十五万にも膨れ上がっていたという記録もあるほどの大変な賑わいぶりです。エルサレムは祭りの熱気に包まれていた、主イエスはそんな神の都を見て、慟哭されました。何故でしょうか？

エルサレムがこの後に徹底的に滅ぼされる事が主イエスだけには見えていたからです。この時から約四十年後、紀元後66年、ユダヤ人虐殺を発端として民衆から大規模な反乱が起こり、ローマ軍との全面戦争へと発展します。非常に激しい戦争で、一時はローマ軍が敗北を喫して撤退するほどでした。ですが、もともとの国力が違いすぎます。急速にユダヤ側の敗色は濃くなり、遂に首都エルサレムは包囲されます。43節の堡壘というのは、エルサレムの城壁を乗り越えるために、土を高くもって築かれたもの。この堡壘を四方八方に築いて押し寄せてくるローマの大軍相手に、エルサレムは二年間、持ちこたえます。しかし、長い籠城の果て、深刻な飢えが市民を襲い、子供を殺して食べてまで飢えを凌いでいた、阿鼻叫喚の地獄のような様子であったそうです。反乱軍内部でも分裂が起こります。そして、紀元後70年、堅い防御を誇ったエルサレムも、遂に陥落します。エルサレムの民を待っていたのは容赦ない虐殺と破壊。44節「お前とそこにいるお前の子らを地に叩きつけ、お前の中の石を残らず崩してしまう」とある通りの事が起こります。お前とは、都エルサレム。「お前の子ら」とは、エルサレムの住民。「お前の中の石を残らず崩してしまう」とは、壮麗なエルサレム神殿や数々の建物がことごとく破壊される様子を言っています。住民は殺され建物は破壊しつくされるといふ40年後の凄惨な滅びを確信して、主は嘆き悲しんでおられます。

主イエスはキリスト、子なる神なので、主の悲しみは、私達人間が伺い知る事ができない神の悲しみ、父なる神の悲しみと言ってよいと思います。天のみ神という全知全能のお方と等しい御子が、涙を流し慟哭して私達人間の滅びを悲しまれるとは。全知全能の父なる御神は、エルサレムの住民達を支配して造り変え、自分の意にそう操り人形のようにして、破滅から救うこともおできになるはず。しかし、父なる御神はそうはなさらない。彼らが神の民であるからこそ、滅ぶ自由さえも認めておられるようです。

しかし、滅びに至るまで神は黙って見ているだけではありません。数々の預言者を送り、自分に立ち帰るようと、呼びかけ続けました。そして、ついには、神ご自身が人間のためにご自分のあり方さえも変えられたのです。それが44節の「神の訪れの時」という言葉です。この「訪れ」という言葉の語源には、「見守る」という意味があるそうです。相手にじっと目を注ぐ、そうして見守っていると、見えてくる人間の悲しみ、苦しみ。本人が気づかない悲しみや苦しみ。そんな人間の悲しみや苦しみを慰めるには、どうしてもそばに赴かざるを得ません。ただ遠くから黙って見ているのではなく、その人の傍らにいく、訪れる。神の御子である主イエスは、神と等しい地位を捨て、人間のもとを訪れてくださいました。私達を滅びから救い出すため

です。しかし、神の都エルサレムはその訪れに込められた神の愛に気づかない、目を開こうとはせず、自ら滅びの道を開いている。そこに、主イエスの深い悲しみと嘆きがあります。

この主イエスの姿から、真実の愛というのは、相手を支配するのではなく、かけがえのない一個の存在として尊び、自由に生かすことであると私達は教えてもらっているようです。それを徹底すれば、どんなに相手を大切にしたいとしても、相手が自分と敵対する道を選ぶ自由さえも受け入れる事になります。だから、真実に自分以外の存在を愛するという事は、深い悲しみと痛みを引き受けることになるのだと思います。愛は、深い嘆きを知っているのです。私達人間は、他者を救う事はできませんから、ある意味、諦めるしかありませんが、全知全能の神とその御子は違います。救える力があるのに、敢えて人間が滅びを選んだのであれば、その自由意思を尊重する。私達には到底、理解できない神の正義と愛。それゆえにこそその悲しみ、痛み、苦しみであろうと思います。エルサレムを前に慟哭する主イエスは、神の愛のはかり知れない深さ、大きさ、高さを映しているようです。

3 エルサレムの人々

主が深く悲しむ事となるユダヤ戦争は、熱心な愛国者達を中心に引き起こしたものでした。彼らは、熱心党と呼ばれるグループを造っていたと言われます。神の民であるユダヤ人々を、神を知らないローマ帝国が力で支配し、搾取する事に怒り、まことの神が支配するイスラエル民族の国を打ちたてようと蜂起したのです。自分たちこそ神を深く信仰し、神の教えに生きている者達だと自負していた事でしょう。しかし、招いたのは滅びでした。彼らが私達より愚かであったとか、間違っていたとは、到底思えません。より純粋であったからこそ、人間の不正義に強く憤ったのでしょう。彼らは自分たちの正義を求めていました。

エルサレムには熱心党とは異なる種類の人々もいました。祭司長などの高級祭司やユダヤ貴族で民の指導者と言われた人々で、サドカイ派というグループに属する人たちが多かったようです。彼らはローマ帝国の支配のもと、限られた自治と、信仰の自由が認められている事に満足し、経済的にも豊かでありました。民族主義的な熱心党の人々とは違い、ローマ支配の内に自分たちの地位や名誉や富に満足している人々でした。主イエスが、45節で追い出した商人たちに、神殿の庭で商売をさせていたのも彼らです。当時のエルサレム神殿に献げる事のできる献金は、神殿の外で通用する通貨ではなくて、神殿専用のお金が必要でした。ですから、手数料をとって両替する人も出てきました。また、生贄用の鳩や羊など動物を売る人々もいて、過越祭を

前にした神殿の外庭は賑やかでした。彼らに神殿で商売する事を許可し、見返りとして売上のかなりの部分をとっていたのが、大祭司をはじめとした高級祭司達です。世界中から訪れる貧しい巡礼者達の神への想いを利用して上前をはねている姿を、主イエスは「強盗」と呼びました。この言葉は、神の民のあり方を鋭く批判した預言者エレミヤの言葉の引用だと言われていました。人間社会としてはよくある事も、神の目には「強盗」と映る、そのことを彼らは考えさえしなくなっていました。彼らは自分たちの富、名誉、地位を求めていました。

また、エルサレムにはファリサイ派や律法学者達もいました。彼らは、高級祭司や貴族達とは異なり、豊かでない人たちも多かったようです。ファリサイ派や律法学者達が第一としたのは、自分達の力で何百にもものぼる律法を一つ残らず守り、人々にも守らせる事、そして救われる事でした。彼らは、自分たちが神に救われる事を求め続けていたのです。

このように考え方や行いも全く異なるエルサレムの人々。しかし、みな共通して、平和への道をわきまえず、神が訪れてくれる時をわきまえていない愚かさの中にいたと主イエスは深く嘆いておられます。いったい、彼らはどうして平和への道、神が訪れてくださる時を知る事ができなかったのでしょうか。

4 平和の道を知る

彼らに共通していたのは、今、この時の神の御旨、神の喜ばれることは何か？と祈り求め考える事よりも、自分たちの満足、自分たちの喜びを第一に求めていた事だと思います。その時その時で示される神に喜ばれる道を、真摯に祈り求めていなかったから、自分たちの考えを超える平和の道を知る事ができなかったのではないのでしょうか。みな、自分たちが正しいと思う、自分たちの道を求めて突き進んだ結果、結局は滅びてしまうしかなかったのです。

それは私達も同じです。主イエスがエルサレムに対してあげた嘆き声を思う時、私達自身もまた、神の悲しみ、主イエス・キリストの痛みに関していかに鈍感か？と思わずにいられません。日常を振り返ってからしてそうです。日常の心の殆どが、自分の安心や満足を求めています。キリストの喜び、神の喜びには、心向ける事が少なくキリストを悲しませる事さえしてしまう。びっくりするほどの無頓着ぶり。そんな私が滅びずにいるのは、一重に神の憐みゆえ、キリストの贖罪ゆえです。

しかし、自分たちが滅ぼされないから、それでいい訳ではありません。先ほど申し上げたエルサレムが滅んだ悲惨な有様は、現代でも世界のそこかし

ここで見うけられます。人間どうしが正義を主張しあい戦争を始める禍いを前に、神の御子は、今も慟哭しておられるでしょう。いや、戦争という目に見える場所だけではない、自己中心的なあり方から始まる暴力的な支配が個人レベルでも国家レベルでも行われています。暴力や差別、迫害で蔑ろにされた人々の傍らで、主イエスが涙を流しておられます。

その時、主がより深く悲しまれるのは、信仰が与えられていない人たちではなく、私達キリスト者に対してです。今日の聖書テキストでも、主イエスが悲しまれたのは、ローマ人のあり方ではなく、神の民イスラエルのあり方でした。お前たちは、自分達の信仰心を満たす事、自分たちが満足する事になんと多くの心を奪われるのか、目を奪われるのか。そして、この世界に悲しみ苦しんでいる人々と、その傍らにいる私になんと無頓着なのか？それではエルサレムの人々と変わらないではないか？なんのために私があなた方を訪れ、私の十字架を示したと思うのか？と。

このような主イエスの嘆きを、悲しみを思い起こすために、主の十字架のもとに集って、私達は礼拝を献げ続けるのだと思います。私達は本当に驚くほどに忘れっぽいから、何度も繰り返し主を礼拝し、イエス・キリストのみ思いを心に彫り込むのです。神の深い悲しみを内に秘めるまことの愛をこの心に刻み込むのです。私達が神を礼拝する場所、その時その時の神の御旨を祈り求める場所、そこが祈りの家です。46節「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』」この言葉は、先ほど読み交わしたイザヤ書56章の言葉であります。56：3、5にはこうあります。「主のもとに集って来た異邦人は言うな／主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も、言うな／見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。わたしは彼らのために、とこしえの名を与え／息子、娘を持つにまさる記念の名を／わたしの家、わたしの城壁に刻む。その名は決して消し去られることがない。」神の民でないとは差別されてきた外国人も、子を持つ事ができない宦官であっても、私は決してその名を決して消し去る事はない、忘れない。天の御神が忘れない、ご自身の家へと招く。その家は、人々が神と交わる祈りの家である、とイザヤは預言しています。神は私達を祈りの家での礼拝へと招かれているのです。そこでこそ、私達は神の喜ばれる者へと変えられ、平和への道を見出す事ができます。

5 神の喜びを求める

最後に R・ボーレン先生の祈りを紹介して終わりたいと思います。
「愚かだが労すること、

それはまだとても幸福だとは言えない。
寧ろ、至福にいたるべく賢くなること、
そこでは、聖書が春の果樹園となり、
文字が花開き始め、
胸中の愚かなることも堅固なものに変えられる。
私があなただを喜ぶのではなく、
あなたが私を喜ばれる。
そのことが私を賢くする。」

「私があなただを喜ぶのではなく、
あなたが私を喜ばれる。
そのことが私を賢くする。」

「あなた」とは、主イエス・キリストのみ父であり、主イエス故に私達の父となってくださる天の御神です。天の御神が私達を喜ばれる事こそ、私達が平和の道を見出す賢さを与えられる事、神の与えたもう至福へといたる道だとポーレン先生は詠っておられる。本当にその通りだと思います。

緊急事態宣言の中で、礼拝に多くの制約が生まれています。多くの愛する兄弟姉妹と同じ場所で礼拝を献げることはできません。しかし、私達、聖霊により頼み、霊では一つとなって神を礼拝したい、そして、神が喜ばれる群れとして整えて頂き、なすべき事を示して頂きたいと願います。その時その時、神のみ思いを第一とすべく祈りに祈って、示される歩みが平和への道です。被造物に過ぎない私達に、自分達の思いをこえた平和の道を教えて下さる天の父なる御神を賛美します。